

Tang-ki and Fu-luan : Shamanistic Beliefs in  
Taiwan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 正憲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1242">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1242</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 童乩と扶鸞

— 台湾のシャーマニズム —

Tang-ki and Fu-luan: Shamanistic Beliefs in Taiwan

齋藤正憲

SAITO, Masanori

## はじめに

ひとは、悩む。否、つねに悩みつづけている。思い悩み、苦しいとき、カミに縋りたい、その声を聞きたいと願うのは、人間の性だ。でも、ほとんどのひとは、神と対話する術を持たない。ここにこそ、神との仲介者たる呪術師が望まれ、誕生する根拠が潜在する。ただし、呪術師は当人の熱意や意欲だけで存在を許されるわけではない。ひとびとの、ひいては社会の強い要請のもと、呪術師が生まれるのだ(齋藤 2019: 24)。ならば、呪術師の実態をみることは、当該社会の理解に直結する。かような問題意識に衝き動かされて、筆者は台湾へと向かった。

台湾における呪術的職能者としては、「童乩」、「尪姨」、「扶鸞」などが知られている(劉 1994: 146)。台湾ではとりわけ、南部において古習が残されているというから(劉 1994: 147)、高雄および台南周辺を調査地に定めた。結果、童乩と扶鸞についての情報を得、さらに道士(劉 1994: 144)からも話を伺うことができた。本稿は、その第一報となる<sup>1)</sup>。

## 1. 邱満賢(童乩1)

邱満賢氏は現在62歳である(写真1)。20年ほどまえから、高雄近郊において、童乩として活動しているという。14歳のころから、地元の清雲宮に出入りし、ボランティアとしてかかわってきた。清雲宮は神農大帝を祀る廟である。邱満賢氏30歳のとき、清雲宮において童乩を探す儀礼が開催された。なんでも、



写真1 邱満賢氏

キーワード：童乩、扶鸞、呪術、憑依、台湾  
Key words : tang-ki, fu-luan, shamanism, possession, Taiwan

清雲宮には専属の童乩がいたが、不在となり、あらたな童乩を探していたという。同儀礼に参加したところ、邱満賢氏は神農大帝に憑依されたというのである<sup>2)</sup>。本人は童乩になると決意したが、親や家族に猛反対されて、そのときは断念している。しかし、40歳のとき、再度、神に憑依された。かつて強硬に反対した御母堂も逝去され、また、子どもたちも成人していたので、神意を拒む理由はなくなった。かくて、邱満賢氏は童乩となったのである。

童乩になるには、49日間におよぶ成巫（齋藤 2018: 27）のプログラムを消化しなければならない。神に選ばれた者は49日のあいだ心身異常に陥るとされ（佐々木 1987: 111）、また、扶鸞（台湾）についても49日間、廟に籠って先輩扶鸞の指導を仰いだのちに、「成乩」するという（志賀 2003: 19-21）。具体的には暗室に籠り、精神を集中させて、神と向き合うのである。邱満賢氏のばあい、村びと2名が交替で付き添い<sup>3)</sup>、また、果物<sup>4)</sup>のみを食していたという。また清雲宮の道士の協力も得たという。

邱満賢氏が住まうのは、高雄・大華里である。同地には廟が3つあるものの、童乩を抱えるのは山仔脚地区の清雲宮のみである。くわえて、清雲宮には、邱満賢氏以外に童乩はいない。つまり、氏は高雄・大華里で唯一の童乩となっている。

童乩の活動は、なべて、「農曆」（いわゆる旧暦）に準拠する。農曆の毎月9日、16日、23日に活動を行なうという。これらの日は「公事日」とされる。1回に10～20件ほどの相談が寄せられ、それらに応える形である。場所は清雲宮の祭壇前がおおいといい、時間は午後8:00からである。なお、童乩としての宗教

実践はあくまで無償である。よって、生計は別に立てねばならない。邱満賢氏はかつて土木関係の会社に勤めていた。つまり、童乩は一般の職業と兼業されるのであり、よって、その活動は夜の時間帯が主となるのだ<sup>5)</sup>。

童乩儀礼に臨む場合、1週間前から素食（肉や酒を口にしない）に徹するという<sup>6)</sup>。

ささやかな悩みであれば、講話や、「小型の神輿」（劉 1994: 148, 志賀2003: 7-8）による託宣で対応するという。神輿による託宣とは、童乩が自由に神輿を担ぎ、その動きから神託を読み取ろうというものである。しかし、昏睡状態や全身麻痺などの重篤な内容の場合は、自傷儀礼（劉 1994: 164）を行なう。より深く、神と交信する必要があるからだ。

自傷のために使用する道具5種は、清雲宮に保管されている（写真2）。①釘棍、②鯊魚剣、③刺球、④七星剣、⑤禁口針の5種である。これらの道具は、邱満賢氏が童乩になったとき、清雲宮が専門店から購入してくれたものだそうである。後述する別の童乩・袁快田氏は「五寶」と称していた（加藤 1990: 6, 18）。

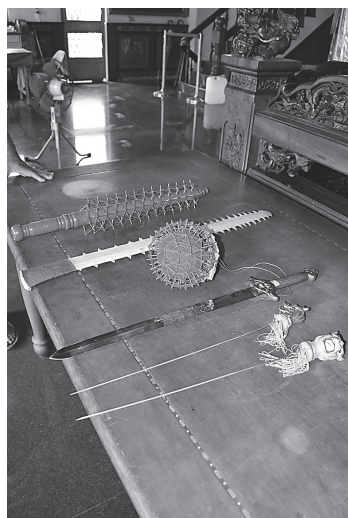


写真2 童乩の5つ道具  
（奥から①、②、③、④、⑤）

邱満賢氏はこのうち、釘棍を用いて、背中を自打・自傷することがおおい。相談内容の軽重にもよるが、数分から数十分ほどの時間だという。自傷儀礼では実際に流血し、なによりも痛い、神の思召しであり、やらざるを得ないと認識されているのである。

## 2. 袁快田（童乩2）

台南の袁快田氏55歳は、現在、道士として活動しているが、かつて童乩であったというので、取材を試みた(写真3)。袁氏の生れ育った村では、「公厝」とばれる祠があった。公厝とは、道士が常駐しているわけではなく、村びとたちの手によって、管理・運営される私設の廟といったところであろうか。同公厝には童乩が所属し、活動していたものの、不在となったので、あたらしい童乩を探していた。具体的には、神輿を担ぎ、託宣を得ようとするものである。袁氏は当初、完全な興味本位で同儀礼に参加し、神輿を担いでみたところ、神に憑依されたという。神は「太子爺」(窪1986: 265)であった。袁快田氏、20歳のときの出来事である。

そのときの詳細はつぎの通りである。袁氏が二人一組で神輿を担いでいると、まずは足先が痺れ、その痺れは頭部にまで、「昇って」いったという。最終的には頭を強烈な痺れが襲うものの、神輿は担いだままだ。この時点で、袁氏は両腕を自らの意志で動かすことができず、それでいて、しっかりと神輿を担いでいたという。このときまで(おそらくはそのあとも)、神輿は激しく上下左右に動いていたが、ここから先の記憶は袁氏にはない。神輿の動きを周囲が解釈して、袁氏に太子爺が憑依したと判断し、意識を回復した本人に伝えたのである。

このような鮮烈な体験をして、童乩を志さない者はいないであろう。袁氏も同様であったが、しかし、家族の猛烈な反対にあい、断念せざるを得なかった。兵役を控えていた袁氏は、日延べすることなく、軍役(陸軍)に就くこととした。ただし、神輿儀礼における憑依から意識を回復した際、太子爺から兵役が短くなる旨を伝えられていた。じっさい、それまでの兵役が3年であったのに対し、袁氏の兵役は2年で済むこととなる。とはいえ、兵役期間の短縮は国による政策決定にすぎない。それでも氏は、太子爺の託宣だと解釈したのである。

除隊後、義兄(姉の夫)の家に設えてあった媽祖廟で神輿儀礼を行なったら、今度は媽祖(窪1986: 232, 252)が憑いた。紆余曲折を経て、結局は媽祖に召命されたのである<sup>7)</sup>。このときの神輿儀礼では、「痺れ」ではなく、「震え」に襲われたというが、この点以外は前回と同様であったという。別の村の高齢の先輩童乩1名に手伝ってもらい、2名で神輿



写真3 袁快田氏

儀礼を執行したという。袁氏、22歳のときであった。

神に召命された後は、49日におよぶ成巫のプロセスを経ねばならず、それは邱満賢氏の場合と同様である。袁氏は仕事をつづけながら、夜、媽祖廟に泊まり込んだ。媽祖の指示に耳を澄ますのである。袁氏曰く、媽祖との同化（憑依）には5つのレベルがあり、徐々に強度を高め、かつ、自在にできるようになれば、成巫完了となる。仕事との両立のため、この修行は断続的に行なわれ、トータルで49日ほどになったと袁氏は認識している。ここに、道士の立ち会いはなく、先輩童乩の補助のみを仰いだという。

童乩としての儀礼は、午後9:00より開始され、2～3時間ほどを費やしたという。このうち、自傷行為は数分（3～7分ほど）を占めたという。袁氏もまた、5つの道具を用意しており、内容は①釘棍、②鯊魚劍、③刺球、④七星劍、⑤月斧である<sup>8)</sup>。このうち袁氏は主に七星劍を使ったという。舌、頭、背中を「切る」といい、実際に出血もする。流血はするものの、トランス状態にあるためか、特段の痛みは感じないと語る<sup>9)</sup>。また、重篤な相談に対処する場合には、5つの道具すべてを駆使し、入念な自傷儀礼に及ぶ。ただし、どんなに入念であっても、無償で行なっていたという。

袁氏は特定の「公事日」を設定しておらず、相談がくれば、その都度対応していた。盛期は週に2～3の相談が寄せられたと回顧している。親戚の相談からスタートしたものの、結局は誰にでも応対するようになり、遠方から訪ねてくる場合もあったという。彼の住まう地域では、童乩は彼を措いてほかにはいない。村の公厝も後継者を見出すことは叶わず、

童乩は不在のままであったという。よって、当時、童乩である袁氏に寄せられる期待はおおきなものがあつたと想像できるだろう。

袁氏は除隊後、いろいろな仕事を転々としていたものの、一般の仕事をつづけながら、童乩を兼業したという。ただし、童乩としての活動期間は4～5年と、とても短い。台南の玄武堂で道士を務めていた林慶全氏に感化され<sup>10)</sup>、師事し、道士へと転身したのである。

### 3. 邱明道（正鸞生1）

扶鸞と称される呪術実践は、「正鸞生」（1名）、「副鸞生」（1名）、「唱鸞生」（1名）、「録鸞生」（数名）のチームによる。扶鸞においては、「乩筆」（劉 1994: 149, 志賀 2003: 2）と呼ばれる道具を駆使するが（写真4）、乩筆は持ち手が二股に分かれ、一方を正鸞生が、もう一方を副鸞生が握る。「神霊」が憑依すると乩筆が激しく動き、神の言葉を「書写」するのである。このとき、「動力源は正鸞生の腕であり、副鸞生は支えているだけで力を入れない」（劉 1994: 149）という。よって、扶鸞の主体は正鸞生にあるといっても過言ではない。唱鸞生は一字ごとに読み上げて解釈をする「判読係」、録鸞生は文字通りの「記録係」となる。

さて、正鸞生を務める邱明道氏は58歳である（写真5）。現在、保険会社に勤めているが、もともとは陸軍所属の軍人であった。除隊後、28歳のときから、正鸞生として活動している。一般企業に勤めつつ、兼業の形で、正鸞生としての務めを果たしてきたのである。

邱明道氏は、鳳山・赤山地区にある明善堂（鸞堂とも通称される）に所属している。明善堂は1795年創建の文衡殿（道教）の一角を占めている。つまり、道教の廟に間借りして



写真4 乱筆 (邱明道氏)

いるのであり、もちろん、廟公認だ<sup>11)</sup>。明善堂は氏の御父堂が設置したもので、邱明道氏へと継承されたのである。明善堂はそもそも、鳳山の別の地区にある拳善堂からの分祠であり(邱 2016: 44)、拳善堂は邱明道氏の伯父(父親の兄)が責任者を務めているという。鳳山・赤山地区にも独立した「鸞堂」が必要だとの認識から、ひとつひとつに望まれて、創設されたのである。

明善堂には「堂生」と呼ばれるおよそ40名の構成員が所属し、「宗教結社」(志賀 2003: 7)を形成している。構成比率は男性2に対して、女性3となっており、やや女性優位である。

正鸞生3名、副鸞生3名、唱鸞生4名、録鸞生3名が中核を占め、ほかの堂生がさまざまな役職を分担している。同堂で執り行われる扶鸞儀礼は、基本的にこの40名ほどの堂生のためのものであり、一般に開放されていない。

明善堂では扶鸞儀礼を実施する公事日が設



写真5 邱明道氏

定されている。農曆の3・6・9のつく日および1日と15日がそれにあたる。

2019年9月1日(農曆8月3日)、午後8:00ころ、堂生が集まってきた。文衡殿1階の広間において、まずは、打ち合わせとなる。じつは明善堂では7~8年分の神託を出版する計画がある。『正法』というタイトルの出版物は無料で頒布される。よって、出版費用は堂生からの篤志で賄われなければならぬ。本日の扶鸞儀礼は、出版物刊行の具体的な日取りを決める(決めてもらう)のが目的である。

出版にむけた打ち合わせが完了した8:30ころ、堂生は文衡殿2階に移動した。2階には鸞堂の祭壇が設えてあり、そこで儀式を執り行ない、それを堂生たちが見守るのである。今回は総勢35名が参列し、男性14名、女性21名という構成であった。

儀礼に先立って、参列者全員が祭壇に向かって跪拝する(写真6)。ただし、正鸞生のみは控室にあって、「静座」していたという。同控室は、正鸞生のみが立ち入りを許された



写真6 扶鸞儀礼前の跪拝

空間で、2階奥にある。ほかの堂生が階下で打ち合わせをしている時点から、控室に籠り、心静かに精神統一をしていたのである。

奥に設えられた祭壇のまえにはテーブルが置かれ、祭壇正面に正鸞生1名、副鸞生1名が陣取った。正鸞生たる邱明道氏はこのタイミングで登場する。正・副鸞生からみて左側手前に唱鸞1名が佇み、その奥に録鸞2名が控えていた。正・副鸞生の右手には録鸞1名

と「誥踊生」4名が並ぶ。また、「把門生」2名も出入口に控えている。つまり、合計12名で儀礼を遂行していた。なお、誥踊生は神を招く呪文を唱えるのが役割である。当該儀礼では3柱の神が降臨した。「本堂 司禮神（鳥松大華村福德宮徳正神）」、「本堂 副主席（順天府城都大帝）」、「本堂 主壇司（赤山文衡殿文衡聖帝）」である。当該儀礼においては、主として「本堂 副主席」からの神託が下されたという。誥踊生は3回、呪文を唱えたことになる。把門生は、神々の出入りに合わせて、ドアを開閉する係である。

儀礼のあいだ、ほかの堂生23名は左右の壁際に並べられた椅子に腰かけていた（写真7）<sup>12)</sup>。神が降臨すると、最奥に座っていた1名（女性）が、水と果物を祭壇に献上していた（佐々木1987:129）。

邱明道氏の言葉を借りれば、神と「同心」してくると、この文字を書くと神が語りかけてくるそうである。正鸞生たる邱明道氏は、その言葉に従っているだけ。副鸞生は同心できないのだ。なおこのとき、邱明道氏は瞑目しつづけているものの（写真8）、精神は正常であり、トランス状態（佐々木1980:33-



写真7 扶鸞儀礼の様子



写真8 邱明道氏による扶鸞儀礼

34) に陥ることはないという。この点が童乱との最大の異点であると、邱明道氏自身が明確に認識しているのである。

神意のままに手を動かせば、結果として乱筆も動く。乱“筆”といっても、実際に文字を書くのではなく、ただ、設置された盤上を動くのみである(志賀 2003: 4)。唱鸞がその動きを観察し、文字として読み取って、声に出して読み上げる。それを録鸞が筆記していくという手順だ。乱筆の動きによって示されるのは台湾語となっている。

儀式の中心である乱筆儀礼は、およそ40分にもおよんだ。結果、381字(句読点を含む)の託宣を授かった。この間、邱明道氏は激しく腕を動かし、汗も滴るほどであった。紡ぎ出された文言の日本語訳は、つぎの通りである(鈴木勝陽氏訳)。

民国108年 <sup>つちのどい</sup>己亥 旧暦八月三日 邱明道

最初に、明善堂(以下、本堂)の司禮神(鳥松大華村福德宮福德正神)が到着。

この後にご到着される本堂の副主席に対しては礼節をもってお迎えするよう、各堂生に勧告する。

次に、本堂の副主席(順天府城都大帝)が降臨。

以下、副主席の談話。

鸞堂営みの要諦とは、一つ、自らの身を修めること、一つ、天に代わり世間に奉仕することにある。堂生たる者この要諦を知らなければならない。身を修めるといふことは自らが望み、悟りを果たすということであり、日々の反省を通じて自らの不誠実な言動を改めるといふことである。人たるや過ちを起ささないことは不可能でありながらも、過ちを知るといふことこそが重要であり、それは自らを省みることのでられるものである。そして、過ちを理解した後は、自らを改めるといふ決心決意を持つ必要がある。これこそが身を修めるといふことに必要な過程なのである。世間への奉仕については；一つ、託宣を世の為に広め伝えること。一つ、堂生として身をもって教義を体現すること。この二つこそが、世の為人の為になすべきことである。これらの実践に励むことは本堂建立来の教えであり、初心に違ふことはない。

以下、副主席の談話(続き)。

『正法』の編集作業については、急いで進めること。各持ち回りにあたってはより気を引き締め、作業を進めるようにすること。

齋藤先生へ贈る。

詩

早稲田大学に良田を贈る。

齋藤先生の後学育才の力は素晴らしい。

教義の本質を徹底的に研究されたい。

広く見聞することで自ずと明らかになる。

最後に、本堂の主壇司が降臨。

以下、主壇司(赤山文衡殿文衡聖帝)の談話。堂生皆互いに励ましながら身を修め、教えに準じ真に修め、齋藤先生がより一層本堂の教義を理解されることに協力されたし。



今回の「乩示」（志賀 2003: 55）では、出版にかんする具体的な内容はともなっておらず、むしろ、一般的な訓示に終始した。しかし、そのことに不満を抱く堂生はいない。定期的開催される扶鸞において、かならずしも、決定的な「乩示」がもたらされるわけではないようだ。

また、最後に筆者にあてたメッセージが添えられたのには驚いた。とはいえ、神が依頼者の個人名に言及する事例もないではない（香港の扶鸞、志賀 2003: 21）。扶鸞儀礼によって、神と人間との距離は劇的に縮められるようだ。

#### 4. 邱延洲（正鸞生2）

邱延洲氏は邱明道氏の御子息であり、現在32歳、気鋭の正鸞生である。来年、博士号を取得する予定の俊英は、将来、研究職に就くことを志望している。志望しつつも、正鸞としての職責を担おうとしているのである。

邱延洲氏の職能は、邱明道氏のそれとおおきく変わるところがない。明善堂は3名の正鸞生を抱えているが、3人で月に11日の公事日を分担するのだ。3のつく日は邱明道氏、6のつく日は邱延洲氏がそれぞれ受け持ち、9のつく日はもう1人の正鸞生（蔡萬清氏）が担当する（1日と15日は邱親子が分担しているという）。邱延洲氏について刮目するべきは、成巫のきっかけである。氏の成巫には夢が関係していたのである。

父が正鸞生を務めていることもあり、邱延洲氏は18歳のころから、明善堂の手伝いに勤しんでいた。その後、22歳、大学生のとき、奇妙な夢をみたというのだ。壮麗な関帝廟で関帝に出会ったのである。関帝の手には書物があり、そのページを捲ろうとしたら、場面

が急に変わり、なんと自らが関帝の頭上に座り、自分でページを捲っていた。そして同書が『春秋』であると認識できたところで、夢から覚めたという。

大学を卒業して、帰省したころから、夢にみた廟を探し歩くようになる。そしてついに、夢に出てきた廟に巡り合えたが、それは地元えにしの文衡殿であった。深い縁を感じ取った邱延洲氏は翌日から、明善堂の門を叩き、堂生となった。22歳で宣講生、24歳で校正生、26歳で録鸞生と、さまざまな役職を経験し、31歳のとき、ついに正鸞生へと昇り詰める。

昨年2月1日から29日（農曆）にかけて訓練期間が設けられ、邱延洲氏は実践練習に入ることとなったが、最初の扶鸞実践の、冒頭の20分ほどで、コツを掴んでしまったという。邱延洲氏はいわば「エリート」であり、それを周囲も認めているのである。その声望の一端は、夢をみたことに起因しているのは間違いない。

研究職を志す邱延洲氏は、熱心に扶鸞を考究している（邱 2016）。氏の見識にもとづけば、扶鸞の前身は宋代以降の「扶筭」であり、さらに遡れば「扶乩」にいたるといふ。扶乩の担い手は女性であり、粘土の人形を使った占いである。宋代以降、筭を動かして占う（筭を鸞筆として利用する）扶筭が隆盛し、宋代末までには、徐々に男性が加わるようになった。他方、民間信仰としての扶筭の隆盛に危機感を募らせた道教は、差別化を図るために、霊鳥である「鸞」になぞらえて、「扶鸞」という言葉を使い始めたという。明代以降のことであり、爾来、男性が行なう扶鸞として定着していくのである。以上の大筋を受け入れるのであれば、呪術の担い手が女性から男性へと遷移していったことを認めざるを得ないだ

ろう (志賀 2003: 112)。

なお、活動的な童乩は「武乩」、静止的な扶鸞は「文乩」とされる (劉 1994: 148)。両者はまさに双壁をなすといえよう。

## 5. 林孟毅 (道士)

林孟毅氏は台南で道士を務めている。現在40歳である。林家は代々、道士として、玄武上帝の祠堂を切り盛りしている。現在では、「玄武道門」と号している。氏の父(林慶全氏)で9代を数え、林孟毅氏は10代目を継承したこととなる<sup>13)</sup>。もともと、屏東に本堂があったが、父の代、1983年に台南へと移転した。

林孟毅氏は父・林慶全氏から10年前に道士を継承したが、その時点では林慶全氏は存命であった。林孟毅氏にはほかに3人の兄弟がいるが、道士を受け継ぐことに興味を示さなかったという。林孟毅氏自身も当初はあまり関心がなく、台北のデザイン関連会社に勤めていた。ところが、2007年、父に呼び戻される。玄武上帝の指示があったというのだ。その時点で、中国・福建省に赴任していた林孟毅氏は、帰台を断った。しかしその後、追い打ちをかけるように、今度は孟毅氏自身が夢をみた。玄武上帝に道士となるように諭されたのである。おおいに逡巡したもの、そのころ、体調を崩したこともあって、帰台して道士となる決断をしたのである。2008年のことであった。

玄武道門では以下の9つの業務を受け持っている。①道教科儀 (開廟儀式)、②紅頭法事 (法事全般、ただし葬式は含まない)、③祭煞收驚 (除霊)<sup>14)</sup>、④入神開光 (神像に魂を宿らせる)、⑤安香謝土 (新しく入信するときの指導、地鎮祭)、⑥符法咨詢 (護符製作・販売)、⑦命理評析 (「生辰八字」による占い)、

⑧地理堪輿 (地相判定)、⑨合婚擇日 (結婚式日取り相談) である。

かように、意欲的に玄武道門を切り盛りする林孟毅氏であるが、道士としての彼を取り巻く環境は決して平穏ではない。現在では、月に数回の相談が寄せられるだけになっており、大掛かりな儀礼も3年前に執り行なったのが最後であるという。台湾では旧暦7月を「鬼月」と呼び、祖霊などが現世に戻るとされ、合わせて、呪術的慣行も盛んとなる。そんな「盛期」でさえ、週に1件ほどの相談にとどまっているのが現状である。よって、林孟毅氏は在宅でデザイナーの仕事も兼業している<sup>15)</sup>。つまり、道士としての活動はボランティアに近く、林孟毅氏もそのように認識している。

玄武道門はおおくの門下生を抱えている。門下生には、童乩も含まれるという。なぜなら、童乩の成巫過程に道士が深く関与するからである。林孟毅氏によれば、童乩の成巫過程は以下のように整理されるという。すなわち、①觀乩 (廟が童乩を探す段階で、神輿による童乩の選定儀礼を指す)、②採乩 (参加者・見物人のなかで、神霊に憑依された者が、あたらしい童乩として採用される、劉 1994: 153)、③禁乩 (49日間、暗所に閉じ込められて、毎日、童乩としての教育を施される。50日目に晴れて、正式な童乩となる、劉 1994: 156-157)、④出関 (童乩は神の依り代であり、自傷行為も避けられないことから、生家とのつながりを絶たなければならないとされる) の4つの過程である。このうちの禁乩において、新米童乩を一人前の童乩に教育するのが道士の役割なのである。

実際に3年前、林孟毅氏は禁乩にかかわっている。現在童乩として活躍する陳國榮氏の禁乩である。陳家はもともと村廟の管理を請

け負っており、陳國榮氏の父も童乩を務めていたという。父親の死去にともなって、神霊が憑依したために採乩され、林孟毅氏立ち会いのもと禁乩を経て、童乩になったというのだ。陳國榮氏、40歳のときの話である。

## 6. 童乩と扶鸞の関係

押しも押されぬ正鸞生・邱明道氏は、なんと、童乩を兼ねているという。1993年ころ、氏に神農大帝が憑依したという。神農大帝は、邱明道氏自宅に隣接する文農宮の主神であり、彼は文農宮所属の童乩になったのだ。ただし、49日の成巫プログラムを経たのは、ほかの童乩と同様であるが、3回に分けた、いわば「簡易版」であったという。プログラムの内容も、おおむね、ほかと一緒である。邱明道氏は釘棍による背中への自打を中心に行なうという。

氏が童乩を兼務しているのは、正鸞生では堂生にしか貢献できないからだという。堂生以外のひとが苦しんでいるのであれば、手を差し伸べたい。そしてそのためには、童乩として対応するのが相応しいと考えているのだ。

つぎのような実践事例を紹介してくれた。あるとき、文農宮関係者の御子息が交通事故に遭い、救急病院に搬送された。意識不明の重態に陥ったのである。息子の容体を憂えた家族の懇願を受けて、邱明道氏は童乩儀礼を執り行なった。儀礼に際しては、お札を焼き、その灰を水に溶かした（佐々木 1987: 123）。その水を綿棒で意識不明の御子息の口に含ませたところ、2～3日後、意識が回復したという。もちろん、童乩儀礼と容体回復のあいだに明確な因果関係を認めることは困難である。しかし、かような苦境に立たされたとき、童乩に縋る慣行が残されている事実は動かない（窪 1986: 102）。台湾民間信仰の命脈は、

いまだ保たれているのだ。

童乩に覚醒してからも、邱明道氏は正鸞を兼務しつづけたわけで、まさに「二足の草鞋」を履いていたことになる。否、会社員としての仕事も合わせれば、「三足の草鞋」といったところか。いずれにせよ、童乩と扶鸞の兼務は、両者の根幹が懸け離れているわけではないことを物語ってしよう。

このように、童乩と扶鸞は架橋され得る関係にあるものの、両者が同一の廟や宗教結社において共存することはないといい（劉 1994: 148）、扶鸞を研究する邱延洲氏もそのように考えている。

## むすびにかえて

以上、童乩および扶鸞の実態に触れ得たのは僥倖であったと考える。両者は、独自のスタイルで「神託を得」（劉 1994:148）ており、その存在感はおおきい。ともに、廟などに所属することで、存在を担保されており、道教とのあいだに親和的な関係が構築されているのは疑いを容れまい。宗教と呪術は乖離することなく、むしろ連続しているのであり、両者のあいだに境界線を引くのは困難だ。かような宗教（道教）の在り方こそが、呪術（童乩、扶鸞）を存続せしめているのである。興味が尽きることはない。

いっぽうで、フィールドに立ってみても、厩姨の実態はほとんど聞こえてこなかった。ただし、断片的に耳に入ってきた情報では、やはり、厩姨は女性である（劉 1994: 146）。女性であるがゆえに、道士や廟の公的なネットワークに馴染まず、その本質が厚いベールに包まれることになったのではあるまいか。すでに言及したように、呪術の担い手は女性から男性へとシフトしている（志賀 2003:

112)。ならば、女性呪術師である尪姨を考究すれば、信仰の古層に手が届くかも知れない。一研究者としても、尪姨に対する興味関心に背を向けることは不可能だ。さらなるフィールドワークを敢行する所存である。

## 註

- 1) 現地調査の実施にあたっては、鈴木勝陽氏の協力を仰いだ。のみならず、本稿作成にも多大な貢献をいただいた。氏なくしては、本研究が成立し得なかったことを明記しておきたい。
- 2) 「祭典の最中に、普通の若者がいきなり神憑って暴れだしたりする」(劉 1994: 153) 現象がこれにあたるであろう。
- 3) 後述するように、ここに、道士が積極的に関与することもある。
- 4) 果物を「神への供物」と考える事例がマレーシア童乩信仰に認められ(佐々木 1987: 129)、参考になる。
- 5) 童乩の儀礼は主に夜間(午後 8:00~11:00)に行なわれるという。なぜなら、「童乩の多くは昼は労働者として仕事に従事し、夜間にのみ神に仕える時間をもつからである」(佐々木 1987: 112) といい、本稿報告事例とよく符合した。
- 6) いわゆる「齋食」(志賀 2003: 28) と見做せよう。同様の発想は、「採食主義を徹底する」(佐々木 1987: 129) マレーシア童乩信仰にも認められる。
- 7) かつて最初の憑依のときには、公厝に属し、親戚縁者ではないおおくのひとに奉仕することに難色を示されたようである。憑依という現実には率直に受け入れられたのだが、であるなら、親族に貢献してほしいと懇願されたようなのだ。よって、姉の嫁ぎ先の媽祖廟を活動拠点とすることはおおいに歓迎され、その方向で決着したと評価することができるであろう。
- 8) 邱満賢氏の「5つ道具」とほぼ共通するものの、⑤の禁口針が月斧に変わっている。主に5種の道具を駆使するいっぽうで、若干のヴァリエーションが許容されるといったところであろうか(劉

1994: 167-169)。

- 9) なお、「医学的見地よりすれば、童乩が傷つけるのはたいてい治癒しやすい個所だとされている」(劉 1994: 168) という。
- 10) 袁氏は、林慶全氏主催のセミナーに参加し、感銘を受けたと述懐していた。
- 11) 電気・水道代は文衡殿が負担してくれるという。
- 12) 女性の生理は不浄であると見做され、例外が許容されることはあるものの、原則は男性優位である。正・副鸞生を女性が担当することもほとんどないという。このことを裏付けるように、観察に回った6名の男性は正鸞生のすぐ近く、いわば「上座」を占めていた。
- 13) 第8代の祖父・曾月頭氏は、林家直系の祖母・林欽妹氏と結婚し、道士を継いでいる。
- 14) 「祭煞」とは「煞神」を祀ることを指し(松本 2001: 44)、「收驚」とは、遊離した子ども魂を呼び戻すことである(松本 2001: 74-75)。
- 15) 林孟毅氏の祖父・曾月頭氏は農業と道士を兼業していた。また、除隊後は道士を専業としたものの、父・林慶全氏も職業軍人を兼務していた。既述の袁快田氏は専業道士としての林慶全氏に師事したのであり、慶全氏が意欲的に玄武上帝信仰の普及に努めていたことは想像に難くない。註10)も参照のこと。

## 参考文献

- 加藤敬 1990『童乩<sup>タンキョー</sup>：台湾のシャーマニズム』、平河出版社。
- 窪徳忠 1986『道教の神々』、平河出版社。
- 邱延洲 2016『臺灣鳳邑儒教聯堂的飛鸞勸化與其社會網絡』(高雄研究叢刊、高雄市立歴史博物館)。
- 黄蘊 2011『東南アジアの華人教団と扶鸞信仰：徳教の展開とネットワーク化』、風響社。
- 齋藤正憲 2019『呪術師のいる風景』、東京図書出版。
- 佐々木宏幹 1980『シャーマニズム：エクスタシーと憑霊の文化』、中公新書。
- 佐々木宏幹 1987「東南アジア華人社会における童乩信仰のヴァリエーション考」直江廣治、窪徳忠(編)『東南アジア華人社会の宗教文化に関

する調査研究』、南斗書房、107-134頁。  
志賀市子 2003『中国のこっくりさん：扶鸞信仰と華人社会』、大修館書店。  
松本浩一 2001『中国の呪術』、大修館書店。  
劉枝萬 1994『台湾の道教と民間信仰』、風響社。

#### 【概要】

乩童與扶鸞：臺灣民間信仰的實地調查記錄

齋藤 正憲 著（鈴木 勝陽 譯）

筆者為了解民間信仰的緣起及發展，認為需對其社會的實際情況做調查並深理解。因此筆者在台灣進行了實地調查及對各靈媒師的訪談。包括：乩童、扶鸞以及道士。以下描述是實地調查及訪談的記錄：

(1)邱滿賢先生是一位在高雄的乩童。在當地清雲宮正參加觀乩儀式時，由神農大帝降臨上身，決心成為乩童。要成為乩童，必須經過四十九天的禁乩過程。進入暗室，集中精神注意力，與神明進行心體的交流。在這過程裡，清雲宮的道士也有參與協助。據訪談，乩童可視為是一種由道士公認的宗教性職務。

乩童的儀式執行原則上在所定的“公事日”進行。由邱滿賢先生通過儀式執行的形式幫信眾解惑。

若信徒狀況比較不嚴重時，會以吟唱，口述或“抬神轎”的方式來執行。抬神轎方式是由乩童及其副手各執手轎左右兩邊的轎腿起乩降駕，並從它的運作中讀取神諭。然而，在諸如昏迷或全身麻痺的嚴重情況下，乩童會使用各種法器敲打自己身體，使得血流如注，展示神威。在自殘行為後，會以口述或開護符的方式來幫信徒驅魔鎮煞。

用於的法器有五種（①釘棍、②鯊魚劍、③刺球、④七星劍、⑤禁口針），通常保管在清雲宮裡。據邱滿賢先生說，五寶中，釘棍使用的比較頻繁。對帶有血流痛苦之行為的認識；邱滿賢先生說；實際上過兩至三天後，傷口即可治愈。這是隨神明意願，要感謝神明。

(2)在台南今年五十五歲的袁快田先生現任職務是道士，但曾是乩童。在當地村落的「公厝」參加觀乩儀式時，由太子爺降臨上身，之後經過家人的反對，最終成為親戚家裡奉拜的媽祖廟的乩童。

與上述邱滿賢先生同樣，為了成為正式的乩童，袁快田先生也經過了四十九天的禁乩過程。在袁快田先

生的禁乩過程裡，並沒有道士的參與，但有了村落裡的長輩乩童的協助。

袁快田先生的乩童儀式執行是在晚上九點開始，而執行時間大約持續兩至三小時。其中，帶有自殘行為時，其行為時間佔約三至七分鐘。袁快田先生用於的法器也是五種（①釘棍、②鯊魚劍、③刺球、④七星劍、⑤月斧），其中，主要使用的是七星劍。袁快田先生用於其法器“切割”自己舌頭，頭部和背部，使得血流如注。據訪談，因儀式執行時身體由媽祖所控制，實際上袁快田先生主意識是感覺不到疼痛的。此外，在有極嚴重狀況的信徒時，會使用全部的法器進行自殘儀式來幫信徒驅魔鎮煞。

袁快田先生的儀式執行沒有設定具體的“公事日”，原則上如有信徒詢問則作回應。據訪談，最頻繁時一周會有兩至三次的幫信徒服務。原本服務對象只限於親屬信徒，久而久之，範圍越廣泛，甚至也有從遠處詢問的信徒。

(3)邱明道先生，今年五十八歲，是一位正鸞生。他屬於在鳳山-赤山區的明善堂（鸞堂）。其堂擁有三十至四十名的“堂生”成員形成信仰組織。

二〇一九年九月一號（農曆八月三號），明善堂所定的公事日之一。當天下午八點，堂生一同到齊。當各位堂生在一樓開講的時候，正鸞生在二樓靜室裡面靜坐使心靜下來，為儀式執行做準備。在扶鸞儀式開始之前，各位堂生一同向主壇跪拜。主壇前放置的是鸞臺，由一位正鸞生及一位副鸞生站前。從正副鸞生看起左側前方站了一位唱鸞生，兩位錄鸞生則在唱鸞生後面。而右前方站了一位錄鸞生及四位“誥誦生”在其錄鸞生後面。此外，還有兩位“把門生”在入口處。正鸞生的邱明道先生會在各位職務生待好在指定位置時才上位。當天的儀式共有三位神明降臨；分為「本堂 司禮神」、「本堂 副主席」、「本堂 主壇司」。主要善文由「本堂 副主席」所論。

據邱明道先生說，當他“同心”與神明時，他就能開始運作鸞筆。同心時，邱明道先生的精神/主意識是正常的，而不是陷入精神恍惚的狀況。這一點則是與乩童儀式執行時的精神狀態的最大區別。

扶鸞儀式主要部分為乩筆，持續了約四十分鐘。神明所論的善文總有三百八十一個字（包括標點符號）。在此四十分鐘，正鸞生的邱明道先生用力猛烈地舉起手臂運作鸞筆，露出的是滿身汗水。此外，當唱鸞生

無法理解運作及筆跡時，周圍的錄鸞生及和誥誦生會做一些讀字理解的協助。儀式結束後，大約有五至六位主要堂生進行善文的確認。

(4)邱延洲先生是邱明道先生的長子，目前三十二歲，是明善堂的新代正鸞生。

邱延洲先生的正鸞生職務與邱明道先生的內容大致上同樣。邱延洲先生成正鸞生的過程令人刮目，以下詳述。

因父親職務為正鸞生的關係，邱延洲先生自從十八歲的時候開始幫忙明善堂各種堂務。後來在二十二歲的時候，夢到了神託夢。邱延洲先生在夢中遇到關帝神。邱延洲先生當時非常的驚訝，關帝手中拿了一本書，邱延洲先生好奇的試圖接近伸手翻關帝手中的書，正要碰到書的那一瞬間，畫面突然變化，變成邱延洲先生坐在關帝頭上在翻頁。這時邱延洲先生才知道關帝手中的書原來是“春秋”。下一瞬間邱延洲先生就從夢中醒來。

大學畢業後，邱延洲先生為了追求真相，開始尋找夢中的關帝廟。竟然找到的就是自己老家附近的“文衡殿”。感到深刻機緣的邱延洲先生，經過各種堂務及鸞務經驗後，在三十一歲的時候終於成為明善堂的正鸞生。

(5)林孟毅先生是位在台南的道士。今年四十歲。林家過去一直是道士家系。門派稱為“玄武道門”。

玄武道門（玄武堂）供奉主神為玄武上帝，其外供奉二十至三十尊神明。玄武道門擁有以下服務項目：  
①道教科儀、②紅頭法事、③祭煞收驚、④入神開光、  
⑤安香謝土、⑥符法諮詢、⑦命理評析、⑧地理堪輿、  
⑨合婚擇日。

玄武道門門下有許多門下生，其中包括乩童。這是因為道士會在乩童成立的過程中有著深深地參與關係。根據林孟毅先生，乩童的成立過程如下：①觀乩，②採乩，③禁乩，④出關。其中，道士會在最後的禁乩階段參與，教育訓練新乩童如何成為乩童以後為信徒服務。

三年前，林孟毅先生就有參與過禁乩過程。這是對陳國榮先生（玄武道門門下生，現職為乩童）執行的。陳家是村落裡的廟管家，陳國榮先生的父親也是位乩童。在父親過世時，陳國榮先生四十歲的時候，因為廟裡欠了乩童，陳國榮先生決定去參加廟裡觀乩儀式，這時候由神明降臨上身，決心成為乩童。

筆者認為此訪談非常的僥倖能夠接觸到臺灣民間信仰的一面。兩者（乩童與扶鸞）以各自的風格實踐“代天宣化”。兩者彷彿皆以寄居於廟宮，並與道士建立一定的距離關係來定義他們的職務。筆者認為宗教與民間信仰並不是相背而異態，則是有連續的關係，很難在兩者之間劃清界限。之所以民間信仰（乩童與扶鸞）可在現代持續保持活力，是因為有宗教（道教）信仰的蘊藉。筆者希望之後再繼續研究信仰心竅，對更深層的意涵感到永無止境的興趣。